

障害者団体のプログラムにみられる エンパワーメント実践の技法

横須賀 俊司

県立広島大学保健福祉学部人間福祉学科

2006年 9月12日受付

2006年 12月12日受理

抄 録

ソロモンが論じて以来、ソーシャルワークにおいてエンパワーメントに関する研究は盛んに行われている。その広盛ぶりにかかわらず、研究についての基礎となる明確な定義が確立していないといわれている。しかし、主体自身への内部に向けた動きとその外部に向けた動きとまとめることができる。特に重要とされるのは外部への動きである。どのようにすれば外部への動きとなるのか、その技法を検討することが本論文の課題である。そのために障害者団体が実施していたプログラムを素材にしてどのような技法があるのかを検討した。その結果、障害者としての主体化を図ること、不満や楽しみといったことにより動機付けを高めること、物事を解釈する枠組みを提示することといった技法が明らかとなるであろう。しかし、このような技法だけでエンパワーメントが成功するわけではない。それらに加え、社会環境の整備といったことも同時に必要とされているのである。

キーワード：障害者，プログラム，エンパワーメント実践，エンパワーメントの技法

1 緒言

本論文の目的は、エンパワーメント実践をしていくにあたって、ある障害者団体が実施していたプログラムを通して、どのような技法があるのかを抽出することにある。つまり、障害者団体の実践を理論化しようという試みである。そのため、以下のように論述していくことにする。まずエンパワーメントに関する研究について概観し、エンパワーメント実践における重視すべき点を指摘する。次に、考察の素材となる障害者団体のプログラムについて説明を行う。そこから、エンパワーメント実践と考えられる三つの技法について取り出してみる。そして、最後に障害者団体のプログラムにおける限界を指摘し、今後のエンパワーメント実践に関する展望について若干触れてみることにする。

2 エンパワーメント実践の焦点

ソーシャルワークの領域でエンパワーメントについて論じられるようになったのはソロモンからだといわれている¹⁾。ソロモンは黒人を支援する有効な戦略を求めて、ソーシャルワーク実践の基本的枠組みを發展させようとした。そして、エンパワーメントを次のように定義付けている。「エンパワーメントは、ステイグマ化された集団に属するということに基づいてもたらされる否定的な評価が生み出している無力化された状態を軽減する目的で、ソーシャルワーカーがクライアントやクライアントシステムとともに一連の活動に携わる過程²⁾」である。

エンパワーメントを理解するにあたって鍵になるのが「パワー」である。久保美紀はアメリカでエンパワーメントが表舞台に登場する過程で抽出されたパワー概念について検討している。パワー（力）の構成要素はクライアントの資源の所有との関係性であり、したがって、エンパワーメントはクライアントの資源の所有とワーカー・クライアント・社会システムの三者の交互作用の関数であるとしている。また、ワーカーとクライアントの援助関係の中でパワーが不均衡に配分されるため、そのアンバランスを除去し、パワーを共有することでクライアントの力の源泉を高めていくのだという³⁾。

エンパワーメントは理論的研究だけでなく、実践についての研究も進められている。例えば、コックスとパーソンズ⁴⁾は問題を個人的、対人的、環境的、政治的の四つの次元に概念化し、それに対応したエンパワーメントを志向したインターベンションの焦点について概念化を試みている。また、宮川数君は⁵⁾個人的次元から社会的次元までの一連の段階において、中心となる四つの方法をカウンセリング、相互支持、ア

ドボカシー、ソーシャルアクションとして取り上げ、エンパワーメント・アプローチの技法としている。そして、これらを中核としたエンパワーメント過程を、カウンセリング次元、相互支持次元、アドボカシー次元、ソーシャルアクション次元として説明している。

このようにエンパワーメントに関する研究が広がってきたにもかかわらず、その定義が明確になっていない、曖昧であるといった指摘がされている⁶⁾。比較的最近に出版された社会福祉辞典のエンパワーメントという項目を見ても定義の曖昧さが記されており⁷⁾、その問題が今なお解決されていないことを伺わせる。明確な概念定義が確立していないということは、エンパワーメント研究を推進、發展させていくうえで大きな妨げになる。概念は研究していくうえでの土台である。その土台がしっかりしていなければ、その上に立つものは不安定にしかならない。各論者がそれぞれ異なった意味内容を付与して好き勝手に使用していたとしたら議論することが難しくなる。ある人がミカンについて話をしているのに、その相手がリンゴを思い浮かべて議論を仕掛けても話がすれ違っただけである。したがって、定義を確立させていくことが求められているといえるのである。

このような中で、降幡博亮⁸⁾はいくつかのエンパワーメントの定義を検討して、二つのベクトルに収めんとできるとしている。すなわち、「心理的抑圧から解放され自信を得るといような、主体自身の内部に向けた動き」と「主体自身を取り囲む社会的な状況を変えていくという、外部に向けた動き」の二つのベクトルである。ここでいう主体とは、差別や抑圧を受けて無力化されてしまった人（たち）のことをさす。降幡の定義は、その導き方からして、最大公約数的な性格を持っている。エンパワーメントの定義が確立していない中で、最大公約数的な性格は多くの人の承認を得ることができる。したがって、これを暫定的な定義として採用することができるだろう。

前者を一言でまとめると、無力化されている人（たち）が自己肯定できるようになる内的変化といえる。自分を卑下していたり、自分に自信をまったく持つことができなければ、何事に対してもやる気すら起こらないだろう。やはり、自己肯定できるようになることは必要である。それによって無力化された状態から抜け出す道が開かれる。内面が充実することで、社会に対して何らかの働きかけをしていく力もついていく可能性も高まる。そのため、自己肯定できるような実践が求められることになる。エンパワーメント実践にあたって「ストレングス視点」との親近性が指摘されているが⁹⁾、これなどは有効な準拠枠といえるのかもしれない。障害者団体ではピア・カウンセリングという手法を用いて、障害者の自己肯定できる一助となるような活動が行われていたりする。

後者は社会的状況を変えるために自分の外部に対して働きかけるといふ行為である。エンパワーメント実践の成功の可否は、無力化されていた人が外部への働きかけといふ行為をできるかどうか重要なポイントとなる。自己肯定をできるようになっている方が、外部への行為に踏み出しやすい。しかし、自己肯定ができてからといふと、行為をすることは限らない。自己肯定によって内面が充実しても行為に及ばないことはある。つまり、自己肯定できることと、社会的状況を変えようといふ行為をすることは別の問題としてとらえる必要があるといふことである。したがって、エンパワーメント実践ではいかにして行為に踏み出すことができるのか、自己肯定以外にもその方策を考えることが求められる。エンパワーメント実践にあたっては行為に踏み出すことができるような技法として、どのようなものがあるのか。この点について、障害者団体が実施したプログラムを素材に考えてみることにしよう。

3 障害者甲子園というプログラム

兵庫県西宮市に拠点を置くメインストリーム協会¹⁰⁾(以下、MSAと略す)は「全国高校生障害者リーダー大会」(以下、通称である「障害者甲子園」と表記する)といふプログラムを実施していた。これを取り上

げて、エンパワーメント実践にあたって、どのような技法が試みられているのかを検討してみよう。障害者甲子園を取り上げる理由は二つある。まず、障害者甲子園は必ずしもエンパワーメント実践を意図して実施されたものではないが、筆者がプログラムの実施に関わる中で、エンパワーメント実践としての側面を有しているものと実感することのできるプログラムであったためである。また、他の障害者団体には障害者甲子園のように高校生を対象に実施するといふ先駆的なプログラムが見あたらなかったということにもよる。

障害者甲子園は1993年の夏期休暇に初めて開催された。その後、2002年まで毎年夏期休暇中に開催され、計10回にわたって実施された。大会の概要は各年によって若干異なっているが、二泊三日か三泊四日の期間で行われている。内容についても概ね講演会、交流会、ツアー・観光、分科会、1分間スピーチといったものが盛り込まれている(表1・2参照)。一般的には大会が始まってからプログラムがスタートするが、障害者甲子園の場合は、大会開催以前からすでにプログラムが始まっているといえる。大会の参加者は当日、公共交通機関を利用して原則として一人で兵庫県西宮市の会場までやってくるのが求められているからである。その過程で出くわす経験が重要な役割を果たすことになる。このことについては後述する。

表1 第6回障害者甲子園の日程表

● ● ● 日 程 表 ● ● ●	
8月25日(1にちめ)	
14:00	開会式(西宮市総合福祉センター)
16:15	バスに乗って兵庫県立総合体育館へ移動
16:45	到着、オリエンテーション(体育館前)
17:30	交流会開始(兵庫医大鳴尾浜グラウンド) 腹の底から大爆笑???
20:00	交流会終了
21:00~22:30	入浴
22:30	消灯
8月26日(2にちめ)	
6:20	起床
7:00	朝食(ホームステイの説明)
8:30	観光出発(一階裏出口駐車場に集合) 神戸、大阪、京都に出陣!!
16:00	居残り組は体育館へ
17:00	観光終了 各ホームステイ先に各自で出発 居残り組は体育館へ
18:00	各ホームステイ先に到着!! 居残り組体育館に到着!! 夕食(エントランスホール)
18:30~20:30	ゲーム(エントランスホール) 何をするかは実行委員も知らない!?
20:30~22:30	入浴
8月27日(3にちめ)	
7:00	起床
7:30	朝食
10:30	体育館到着
11:00	講演会(二階視聴覚室) 講演者 メインストリーム協会 佐藤聡
12:00	昼食(エントランスホール)
13:30	分科会 心の奥へ奥へと迫っていきましょう!!
	恋愛① 視聴覚室
	恋愛② 会議室
	街づくり 研修室1
	学校 研修室2
	就職 研修室3
	一人暮らし 研修室4
	コミュニケーション 第3和室
16:00	スタッフとの面談(研修室1~4)
18:30	夕食パーティー
20:30~22:30	入浴
22:30	消灯
8月28日(4にちめ)	
6:30	起床
7:00	朝食(エントランスホール)
8:30	梅田に出発(一階裏出口駐車場に集合) 荷物忘れたらあがんで!!
10:00	サン広場に到着
10:30	1分間スピーチ ゆうてまえ!!
11:30	昼食開始(スピーチは続く)
13:30	閉会式
14:00	解散

出所「第6回障害者甲子園報告書」メインストリーム協会、1999年

表2 各回のプログラム内容

	講演会	交流会・ゲーム・パーティー	ツアー・観光	分科会	1・2分間スピーチ	面接・面談	全体討論会	要望書提出	ホームステイ
第1回	○	○	○	午前			午前		
第2回	○	○	○	午前・午後			午後		
第3回	○	○	○	午前・午後			午前		
第4回	○	○	○	午前・午後	○	○			
第5回	○	○	○	午前	○	○			○
第6回	○	○	○	午後	○	○			○
第7回	○	○	○	午前	○	○	午前		
第8回	○	○	○	午前・午後	○			○	
第9回		○	○	午前・午後	○			○	
第10回	○	○	○	午前・午後	○				

参加者を募集するために、養護学校等に募集要項を配布したり、朝日新聞に募集記事を掲載するなどして応募者を募っている。朝日新聞に限定しているのは、朝日厚生文化事業団が助成、後援団体となっているためである。作文と直接交渉により、各都道府県の障害者の高校生を一名から数名選抜している。リピーターの参加も認めている。当初は肢体不自由児と聴覚障害児に限定していたが、第6回大会からは視覚障害児を、第7回大会からは知的障害児を参加対象者として加え、その範囲を広げている。

障害者甲子園は地元の健常者高校生を中心に結成された実行委員会とMSAのスタッフによって企画、運営されている。地元高校生を組織化するために、西宮市内の高校に実行委員会の募集要項を配布したり、人権教育で協力関係にある高校には教員からの呼びかけを行ってもらうなどしている。

プログラムの運営に必要な財政は朝日厚生文化事業団からの補助金、実行委員会を中心とした募金活動、企業からの協賛金、MSAからの支援金によってまかなわれている。それらの資金により大会運営費、参加者の旅費と宿泊費が拠出されている。このため参加者は無料で大会に参加できる。このようにした理由としては、参加者が高校生であるため、金銭の負担がかかってしまうことで参加を見合わせることを避けるためである。

障害者甲子園は、高校生の障害者を障害者運動における将来のリーダーとして育成することを目的としているが、一足飛びに運動のリーダーになることは難しい。障害者運動のリーダーになるには、まず親元や施設を離れて、自己決定に基づいた自律生活を送ることが前提となるため、最低限そこにたどり着けることがミニマムの目標となっている。したがって、自律生活に踏み出すことができるように障害者をエンパワーしていくことが目的となっているといっている。自律生活を実現するには、親を説得したり、社会資源を自分で利用していくなど自分の外部に働きかけていくこと

が求められる。したがって、このプログラムをエンパワーメント実践ととらえることができるのである。

しかしながら、障害者甲子園はエンパワーメントということ意識して実施されているわけではない。そのために、エンパワーメントに向けた体系的なプログラムが組まれているわけでもないし、エンパワーメントとは関係のなさそうなものも含まれている。しかし、障害者が自分の置かれた状況を変えていこうとする、すなわち自律生活に踏み出そうと思えるような仕掛けがちりばめられている。以下では、プログラムにみられる次の三点に主たる焦点を当ててみる。すなわち、大会に参加するために求められる一人で公共交通機関を利用すること、遊びのプログラム、講演や分科会である。これらのことがエンパワーメント実践において、どのような働きとして抽出することができるかを順次考えていくことにしよう。

4 障害者としての主体化

1981年の国際障害者年以降、障害者を取り巻く状況は大きく変化してきたといえる。障害者も社会に統合されることが望ましいとされ、障害者と健常者が共生できる社会が求められるようになったのである。これらを支えているのがノーマライゼーションという理念であったり、バリアフリーという考え方である。これにより公共施設からは物理的障壁が取り除かれていき、公共交通機関ではある程度の配慮がなされるようになってきた。また、障害者に対する人々の意識や態度にも何らかの変化がもたらされた。障害（インペアメント）は個性であるとか、障害者も同じ人間であるといった言葉がそれを端的に表現しているといえるだろう。しかし、ノーマライゼーションが浸透し、バリアフリーが進んできたことで、本当に障害者は社会に統合され、障害者と健常者の共生が可能となっているのであろうか。すなわち、障害者に対する差別や抑圧はなくなったのであろうか。

杉野昭博はその意義を認めながらも、ノーマライゼーションやバリアフリーを次のように評価する。手足が再び動くようにするのがリハビリテーションである。それによって障害者を健常者社会に同化させようとしても自ずから限界がある。この「同化の限界」を乗り越えるために社会を障害者が同化しやすい形にデザインしなおす「洗練された同化政策」がノーマライゼーションやバリアフリーである。しかし、いくら洗練したところで、結局のところ障害者を「健常者文化」に同化しきることはできない、と¹¹⁾。

確かに、同化が可能な障害者はいる。労働意欲と労働能力があるにもかかわらず、エレベーターなどの物理的設備がないという理由によって雇用されない車いすの障害者などがそれにあたる。この障害者に対して、物理的設備の配慮がなされれば、雇用を拒む理由はなくなる（そもそも物理的設備の不備が雇用拒否の理由として認められてしまうことが問題ではあるが）。これによって障害者は社会に統合されることになる。しかし、今のままでは労働能力がないとされる障害者が存在するのも事実である。このような障害者は、たとえば労働意欲があったとしても、社会に統合されることはない。雇用された障害者にしても、それだけで問題が解決するわけではない。健常者と比較すれば体力的に劣る場合が多いと考えられる障害者が、健常者と同等のノルマやペースを求められたときに、果たしていつまで働き続けることができるだろうか。無理がたたって二次障害（インペアメント）を引き起こし、結局は退職せざるを得ないことも十分考えられる。

こうしてみると1980年代以前に比べればましになった部分もあるが、まだまだ不十分なところもあり、今なお障害者には制限や制約がつきまわっているといえる。このままで満足だという障害者にとっては、それでいいのかもしれないが、そうではないと感じている障害者にとっては、この状況が変革されていくことが望まれることになる。それには「障害者になる」ことが大きな役割を果たすことになる。「障害者になる」というのはインペアメントを持って障害者になるということではない。そもそも、障害者甲子園の参加者は障害者とされている。そうではなく、ここでいう「障害者になる」とは、障害者として主体形成していくことである¹²⁾。

この社会では、さまざまな名前が付けられることによってカテゴリー化がなされている。障害者も障害者という名前が付けられることによって障害者というカテゴリーに腑分けされる。もともと障害者なる存在があって障害者と名付けられたわけではない。障害者という言葉によって、そこにはめ込まれた特定の集団が障害者として認識されるようになったにすぎないのである。その集団の範囲に合理的根拠はない。つまり、障害者であるか、ないかという基準に正当性など存在

しないということである。

どのような基準にせよ、障害者という名付けの行為が障害者を実体化する。つまり、ある特定の個人や集団が障害者として認識され、実際に存在する者として扱われるようになるのである。この実体化は価値化を引き起こす。健常者と異なる存在である障害者は、社会的に価値ある存在、あるいは価値なき存在とされるのである。ほとんどの場合は後者の価値化がなされ、障害者は役立たず、邪魔な者とされて社会的に排除されたりすることになる。このような扱いに基づいて障害者は自らのアイデンティティを形成していく。このように障害者はカテゴリー化されたものが自分となるのである¹³⁾。

「障害者になる」とは、障害者がこのようなカテゴリー化をまずは受け入れることから始まる。カテゴリー化を受け入れることで障害者自身が安心することもあるという。ニキ・リンコはアスペルガー症候群という発達障害を持って生まれたが、成人後にその診断を受ける。すなわち、障害者として名付けられるのである。それまでは、何かができないと「故意に手を抜く健常者」としてサンクションにさらされていた。しかし、カテゴライズされることで、新しい所属先や帰属意識を獲得し、身の丈に合った実感とリンクする自己像を形成するきっかけになった。その名付けは違和感を持ちながらも、その正体がわからなかった者にとっては大きな救いであったという¹⁴⁾。

しかし、そのことによって差別を再生産してしまう可能性があるのも事実である¹⁵⁾。障害者と名付けられることは何者であるかを決められてしまうことでもある。したがって、障害者はこうあるべきだという規範のしかかってくることになる。「愛やヒューマニズムを喚起し触発するようふるまうこと¹⁶⁾」が障害者には求められる。それに反するふるまいをとる障害者には有形無形の圧力がかかる。例えば、自己主張をはっきりする障害者に対しては、わがままな奴として正当な扱いがされなかったりする。

この名付けられた意味内容を書き換えていくためには、障害者自らが名乗っていく必要がある。石川准は名乗りにおいて大きく二つの戦略を提示している。すなわち、本質主義の戦略と脱構築の戦略である。注目すべきは後者の戦略である。その特徴を障害者に当てはめるとこうなる。障害者というアイデンティティは立ち上げずに、障害者というポジションを引き受ける。当事者性を引き受けるために障害者と名乗る、というものである¹⁷⁾。このことを人に伝えるのはかなり難しいと石川自身も述べているが、筆者なりに解釈すると次のように説明できる。

アイデンティティを立ち上げないとは、社会から名付けられた障害者という固定化された意味内容に依拠するのではなく、自らが名乗ることによって遂行的に、

また流動的にそのつど形成していくものである。ポジションを引き受けるとは、障害者である自分が社会においてどのような位置に置かれているか、障害者としてどのように扱われているかを認識することである。つまり、障害者であるというその理由だけで、社会から差別や抑圧を受けるという現実を知ることである。このポジションを引き受けるといことが障害者としての主体を形成する第一歩、すなわち、何らかの行動を起こす下地となるのである。

ポジションを引き受けするには、現実を経験するところからしか始まらない。それをプログラムしたのが、障害者甲子園の会場まで一人で来るといものである。自宅から会場までの道中にはいろいろなことが待ち受けていることだろう。障害者甲子園が始まった1993年当時では、今以上にバリアフリーも進んでいなかったし、人々の意識もおぼつかないものであった。そのような状況にあっては、嫌な思いをさせられることもあったに違いない。それは自分が障害者なのだという意識をさせ、自分の社会的位置を知ることにつながる。障害者甲子園とは、一人で公共交通機関を利用することを通して、障害者という理由によって差別や抑圧を受ける現実があることを経験させ、それを主体化の契機にしようという試みなのである。

5 動機付け

一人の公共交通機関利用は自律生活センターが実施している自律生活プログラムのフィールドトリップと同じだといえる。自律生活プログラムとは障害者が自らの選択や決定に基づいて生活を送る(=自律生活)ことができるように、介助者との関係の取り方、金銭管理、自己主張の仕方といったことを学んでいくプログラムである。フィールドトリップはそれらを模擬体験する実習と考えればよい。

石川准はフィールドトリップの意義を次のように分析している。人は何らかの行動をするにあたって極力無難な選択をする。つまり、それぞれの選択肢がもたらす最悪の結果だけを比較して、一番の最悪を避けて選択を行うというのである。これを「ミニマックス戦略」という。例えば、コンサートに行く予定の障害者がいたとする。しかし、当日になっても運悪く介助者を見つけることができなかった。時間的にはもう出発しないと間に合わない。その時、障害者は一人で出かけるか、あるいは諦めるかという判断を迫られることになる。出かけたことでもたらされる最悪の結果、例えば、一人でトイレに行けないのでおもらしをしてしまうかもしれないことと、諦めることで予想される結果、例えば、楽しみを我慢しなければならないこととを比較するのである。そして、人前でおもらししてしまったら…と考えて、おそらくは断念という選択をす

る。社会はこのような心理を逆手にとって障害者の社会参加を押しとどめるのである。このようなことはコンサートに限らず、障害者にとって日常茶飯事なのである。この構造をはずすには、あえて危険を冒す勇気を持つことが必要である。ひょっとすると、コンサート会場には介助スタッフがいるかもしれない。あるいは、たまたま知り合った人と仲良くなり、快くトイレの介助を引き受けてくれるかもしれない。思い切ってやってみると案外簡単に事が運ぶこともあるのである。こうした経験を体験させるためにフィールドトリップはあるのだという¹⁸⁾。

要するにフィールドトリップも障害者甲子園も、行為を起こすために踏ん切りをつけるトレーニングをするということである。障害者甲子園では踏ん切りをつけるトレーニングが他にも用意されている。一(二)分間スピーチやホームステイなどがそうである。前者は大阪の中心地にあるスペースにお立ち台を設定し、壇上に上ってマイクを通して大声でスピーチをするというものである。そこは人通りがかなり多く、ずいぶん目立ってしまう。そのような中でマイクにより大声を張り上げれば、どうしても人目を引く。それでも話さなければならぬのであるから、まさに踏ん切りをつけてやるしかない。後者もいきなり見ず知らずの家庭に派遣されるのであるから、恥ずかしいなどとは言われてられないのである。このように踏ん切りをつけるトレーニングが行われる。

一人の公共交通機関利用は、これに加えてもう一つの意義がある。それは不満を感じさせることである。不満があれば、人々はみんな行為に赴くというわけではない。しかし、不満があるということは現状に満足をしていないことであり、したがって、現状を変えていこうとする原動力になりうる。すなわち、行為に踏み出すきっかけになりうるということである。

クロスビーは不満が発生するメカニズムを次のように説明する。Xをもっていない人が、他人がXを所有していることを知っており、Xに対する欲求があり、Xを獲得する正当な資格があると感じており、Xを獲得することが実現できると考えており、Xを獲得できないのは自分の責任ではないと意識している場合、その人は相対的剥奪=不満を覚えるのである¹⁹⁾。要するに、相対的剥奪とは「人々の現実の充足水準と規範的な欲求水準(期待水準)との比較から生じるところの不满²⁰⁾」のことである。ちなみに、Xは必ずしも物理的なものである必要はなく無形のものでかまわない。

バリアフリーの進展によって設備的な障壁が多少はましになってきたとはいえ、障害者が一人で公共交通機関を利用する場合、不満を感じるような機会に出くわす可能性が高まる。例えば、降車駅にエレベーターがあることを事前に調べて知っていたりすると、その近

くの車両に乗車しようとする人が多い。それが急いでいるときならなおさらである。しかし、障害者は電車に乗る際に駅員から乗車位置を指定されることがある。このとき障害者は、健常者が乗りたいところに乗ることができることは当然わかっている。自分の乗りたいところに乗車したいという欲求があり、そこに乗ることに正当な資格があると考えている。障害者であろうがなかろうが、乗客は乗りたい場所に乗ることが認められているはずである。しかも、乗りたい位置に乗ることは容易に実現可能だと知っているし、しかも、そこに乗れないことの責任は自分にはないと意識している。したがって、障害者はそのことに不満を覚えるのである。乗り換えの回数が増えれば増えるほど、このような経験をするが多くなり、ますます不満を感じてしまうことであろう。

もちろん、不満を感じる仕掛けとして公共交通機関の利用以外のものでもかまわないが、障害者にとって危険性が低く、プログラムの一環としてスムーズに組み込むことができるものとしては、これが適しているといえる。また、障害者の高校生であれば、公共交通機関を利用して遠出するといった経験もまだそれほど多くもないであろう。困難に直面しながらも誰かに頼ることなく一人でどうにかクリアして会場にたどり着くことができれば、それは大きな自信となる。そうなれば、これからはもう少し気軽に外に出て行くことができるようになり、それは社会参加につながる。このような点からも適切なものと考えることができる。

障害者甲子園では、行為に踏み出す動機付けとして別の仕掛けも用意されている。それは楽しさを感じることである。未だ福祉サービスの不足等のために、親が障害者のケアをする場合が多い。それが成人に達していなければ、親の関与はさらに大きなものとなっている。障害者にとっては、それを負担に感じていたり、鬱陶しく感じていたりする。そのような中で、たとえ短期間とはいえ、親元を離れての生活を送ることで解放感を覚えることができる。親から離れて友達や同世代の人々と生活をする自由、楽しさ、それをもっと味わいたい、続けていきたいと思わせることができたならば、それは行為に乗り出す契機となりうるものである。そのために、障害者甲子園では宿泊は合宿形式で高校生同士が自由に交流できるようにしている。翌日のプログラム開始時刻は決まっているが、それに間に合うのなら徹夜で語り合おうが関知しない。とにかく楽しむことができるように干渉は最小限にとどめられている。必ず観光をプログラムの一部に取り入れているのも、楽しむための一端である。

障害者甲子園の終了後、自律生活を始めてみようという思いが強そうな参加者には、高校を卒業した後、二泊三日程度で「ハイレベル甲子園²¹⁾」というプログラムも実施している。これは少人数の障害者を

ピックアップし、再び西宮市に呼び集めるところから始まる。このプログラムの主眼はとにかく楽しむことである。もちろん、さまざまな学習会も行われているが、障害者甲子園に比べて遊ぶことに比重が置かれている。食事会、イベント、成人に達していれば飲み会、パチンコなど、親元を離れると楽しいことがこれほどあるというメッセージを送り続ける。こうして、障害者に行為することでメリットを享受できる実感をさらに提供し、行為に踏み出すための強いインセンティブとしているのである。このように障害者甲子園では行為に向かうための動機付けがちりばめられているのである。

6 フレームの転換

河原で二人の男が流血の殴り合いをしていたところに出くわしたとする。少し離れているためにはっきりとはわからないが、ある人はそれをケンカだと理解した。しかし、その人の隣を歩いていた友人は空手の練習をしていると理解した。同じ出来事を見ているにもかかわらず、このような違いが生じるのはどういうことであろうか。それは各個人の頭の中に解釈の枠組みが存在しているからである。これをフレームという。フレームとは「それ自体は意味をもたないむきだしの出来事の流れを、何らかの組織だった意味あるシーンとして経験させる、経験の組織化の前提、もしくはその『原理』²²⁾」のことである。人はフレームがなければ何を見ることさえできないのである。しかし、フレームによって意味づけられた出来事がずっと同じ解釈をされたままであるとは限らない。それまでとは異なるものとして解説されていく場合もある。殴り合いがケンカに見えていた人もすぐさまボクシングの練習だと認識を改めることも考えられるのである。このように現実には多層的、多元的に構成されることがわかる。いずれにせよ、このフレームこそが出来事の記述を与えるのであり、社会的現実を生み出すのである。

当然のことながら、障害者にもフレームがある。もちろん、各個人によってフレームは異なり、必ずしも同じであるとは限らない。しかし、フレームは個人が勝手につくりうるものではない。社会との相互作用によって生み出されていく社会的なものである。そのため、社会の支配的なものに影響を受けることになり、結果として、障害者に共通してみられるようなフレームが生み出されることがある。例えば、両手にインペアメントのある障害者が衣服を着脱しようとするとき誰かに手伝ってもらわなければならない。この人の手を借りるという出来事を迷惑をかける行為と解釈してしまう障害者は多い。このようなフレームを持ち合わせていると、人手を借りることに躊躇を覚えてしまう。そうなると、その障害者は自律生活を送るという行為に二の

足を踏んでしまい、親元や施設で管理された生活を送り続けることになる。これでは自律生活に踏み出すことの支援にはならない。そこで、自律生活への一步を踏み出すことができるように障害者のフレームを変化させる必要が生じる。それには別のフレームと結合させることが有効となる。障害者甲子園では障害者とMSAのフレームを結合させる仕掛けが含まれている。この「個人の利益、価値観、信念と、社会運動組織の活動、目標、イデオロギーとが一致し相補的になるように、個人と社会運動組織の解釈志向をつなぎ合わせることを」をフレーム調整という²³⁾。

スノーらはフレーム調整を次の四つに分類している²⁴⁾。すなわち、フレーム架橋、フレーム増幅、フレーム拡張、フレーム転換である。フレーム架橋とは、ある特定の争点や問題に関してイデオロギー的には一致しているが、構造的には関連しない、二つあるいはそれ以上のフレームをつなぎあわせることをいう。あることに興味や関心がありそうな人たちをねらってダイレクトメールなどを送り、それに対する興味や関心を掘り起こしていくことなどが例としてあげられる²⁵⁾。フレーム増幅とは、ある特定の争点や問題、あるいは一連の出来事に関係がある解釈フレームを明確化し活性化することである。日常に追い立てられていることで隠れてしまうフレームを明確化、強化することで運動参加を促すことになる²⁶⁾。フレーム拡張とは、プログラムや価値が感情や利害に深く根付いていない場合、個人の感情や利害を取り込めるようにフレームの境界を広げることである。例えば、当初のプログラムや価値にとって重要なものでなかったとしても、個人が重要とするならば、それを取り込むことで潜在的支持者のフレームと調和させていくことである²⁷⁾。プログラムや主張および価値が提供、提示されたとしても、それらが通常のライフスタイルや儀式および既にある解釈フレームと調和せず、時に相容れないことがある。そのような場合には、新しい価値をつくりだし、古い意味や理解を放棄して、誤った信念や間違ったフレームを再フレーム化する必要がある。これをフレーム転換という。要するに、個人と組織のフレームが合わないときに、新しく解釈フレームをつくりなおすということである²⁸⁾。

さらにスノーとベンフォード²⁹⁾はフレーム調整を行う過程としてフレーミングという概念を提示し、診断的フレーミングと予後的フレーミングおよび動機付けフレーミングという三つの中核的な課題について言及している。診断的フレーミングによって何が問題であり、その原因はどこにあるのかを特定する。それに基づいて問題解決の方法や具体的な戦略、戦術およびターゲットを提示するのである。これが予後的フレーミングである。そして、動機付けフレーミングによって問題解決のためには実際に行動を起こす必要がある

ことを喚起するのである。前二者によって個人の合意を取り付け、後者によって行為を促そうというのである³⁰⁾。

障害者甲子園においても、すべてではないが、いくつかのフレーム調整がみられる。全国の養護学校に障害者甲子園への参加を呼びかけることはフレーム架橋の試みといえる。障害者運動に少しは興味がある、あるいは漠然と自律をしてみたいと考えている個人がいれば、その人はMSAとイデオロギー的には一致していることになる。その人たちに対して障害者甲子園の参加を促し、MSAのフレームと構造的に結びつけていこうというのである。また、フレーム増幅も行われている。毎回、さまざまなテーマが設定されて分科会が開かれているが、各分科会にはMSAのスタッフが一人は参加するようにしている。それは、そのテーマに関して起こった出来事の意味をわかりやすく説明したり、自分の身近な生活とどのような関係があるかを伝えたりするためである。それによって個人の曖昧模糊としたフレームを明確なものへと導く。障害者甲子園で行われる講演会では、自律(自立)が主なテーマになっている。これはフレーム転換の試みである。先にも見たように、人の手を借りることは迷惑な行為であるというフレームがある。これに対置するような自律(自立)の考え方を講演という形式で提示しようというのである。自律(自立)とは、他人の手を借りずすべてのことを自分一人でやり遂げることではなく、自分に関する出来事を自己決定することである。自己決定を実現するためには他人に依存してもかまわない。したがって、人の手を借りるとは自己決定の行使であり、迷惑な行為にあたらないというフレームが提示される。個人にとって新たな解釈を示すことで、個人がフレームを作り替えるきっかけをつくらうとするのである。

このように障害者甲子園では、フレームをはっきりとさせたり、新たなフレームへと転換していくことで、個人が自分の経験をとらえ返すことができるような仕掛けをつくっているのである。

7 障害者甲子園の限界

ここまで見てきたように、障害者甲子園では障害者が自律生活に向かう行為に踏み出すことを後押しするために、障害者としての主体形成をはかり、不満や楽しみといった行為への動機付けを行い、フレームを明確化したり再構築し直したりできるような仕掛けがらりばめられている。エンパワーメントの一側面である「社会的状況を変えていく外部への働き」をしていくための技法として、これらのことがあることがわかった。このような技法を含んだ障害者甲子園は、果たしてプログラムとして成功しているのかどうかについて

最後に考えてみよう。

プログラムが成功しているかどうかはその目標をどれだけ達成することができているかによって評価することができる。障害者甲子園の目標は障害者運動へ参加したり、自律生活を始める人が現れることである。しかし、何人といった具合に具体的な人数を掲げているわけではない。したがって、一人でもそのような障害者が現れば成功したともいえるし、一人では成功したとはいえないとも評価できる。全員ではない限り、この人数が何人であっても同様のことがいえる。何をもちて成功したとするかはなかなか難しいところであるが、MSAの中心的なスタッフの多くは必ずしも成功したとは考えていない。障害者甲子園に参加した障害者の中には、障害者運動に携わったり、自律生活を始めた人は確実に存在している。しかし、スタッフが思い描いていたほどはそういった障害者が登場していないために成功の評価ができないのだという。成功したかどうかの評価は別にして、少なくとも参加した障害者の数と比較すれば、ほとんどといてもいいぐらいの人が一歩を踏み出せなかったことは事実である。それは、どこかに何らかの問題が潜んでいるからこそ、思いとどまってしまったのであろう。

エンパワーメントを進めるためのいくつかの仕掛けに共通しているのは、個人の内面に焦点を当てて、それを変化させようとするものだけということである。確かに、個人の内的要因は行為を起こすうえで重要なものである。しかし、高校生個人の内面はこれまでに十数年にも渡って積み上げられてきたものである。それが一度や二度、障害者甲子園に参加したからといって内面が変化すると考えるのは安易である。相当な衝撃でも伴っていれば別であるが、そうでなければ簡単に内面が変化するはずがない。ということは、内面が変わらなかったために多くの障害者が行為をしなかったと考えることができる。このような限界を指摘することは一理ある。それでは内面が変化すれば、すべての人が行為をするのかということそうではない。障害者がどのような状況におかれているかということも重要な要因として働くのである。それは外的要因とすることができる。外的要因としては、大きく二つのことを考えることができる。

まず一つ目の外的要因としては、障害者にとって利用可能な資源がどの程度存在しているかということである。資源としては、情報、お金、福祉サービス、人的ネットワークといったものがあげられる。情報がなければ、何をどうすればいいのかの判断もできないため、何もしないままに終わってしまう。お金に余裕がなければ、何かをすることに躊躇せざるをえない。介助を得ることができなければ、障害者はベッドから起きあがることもできず、何もすることができない。一人きりで何かをするよりは、仲間のいる方が行動もし

やすくなる。このように周囲に資源があるかどうかによって、障害者の行動は大きく左右されることになるのである。

もう一つの外的要因はサンクシヨンの有無である。サンクシオンとは何かをしようとした、あるいは、何かをしたときに加えられる圧力や制裁のことをいう。精神的に追いつめるといった無形のものも含まれる。何かをしようとしても、そのことが社会的に認められていなければ、サンクシオンが降りかかってくることになる。外に出たいと思っても、家族が嫌な顔をすることが予想されると、諦めざるを得ないことがある。「障害者のくせに、何でこんなことをするんだ？」などという言葉が投げつけられると、どうしても萎縮してしまう。このようなことがあると、障害者はやはり大きく影響を受けてしまうことになるのである。

エンパワーメント実践においては、個人の内面にのみ働きかけることがクローズアップされがちだが、このように個人を取り巻く社会的環境がどのような状態になっているのかということも成功の可否を握っている。これからのエンパワーメント実践では個人を取り巻く外的要因についても視野に入れていくことが必要不可欠なことであるといえよう。

注

- 1) 小松源助. ソーシャルワーク実践におけるエンパワーメント・アプローチの動向と課題. ソーシャルワーク研究, 21(2): 4-10, 1995; 久保美紀. ソーシャルワークにおける Empowerment 概念の検討 - Power との関連を中心に -. ソーシャルワーク研究, 21(2): 21-27, 1995
- 2) Solomon, B.B.: Black Empowerment: Social Work in Oppressed Communities, New York: Columbia University Press, 1976: 19
- 3) 久保美紀. 同
- 4) Cox, E.O. and Parsons, R.D.: Empowerment-Oriented Social Work Practice with the Elderly. California, Brooks/Cole Publishing Company, 1994 (= 1997, 小松源助監訳, 高齢者エンパワーメントの基礎 - ソーシャルワーク実践の発展を目指して -, 相川書房)
- 5) 宮川数君. ソーシャルワークにおけるエンパワーメントの実践技法. 小田兼三・杉本敏夫・久田則夫編著, エンパワーメント 実践の理論と技法 これからの福祉サービスの具体的指針. 中央法規: 80-97, 1999
- 6) 三毛美予子. エンパワーメントに基づくソーシャルワーク実践の検討. 関西学院大学社会学部紀要, 78: 169-185, 1997; 久保美紀. エンパワーメント概念の構造に関する研究 - ソーシャルワーク実践

- 理論としてのエンパワーメントの模索一. 社会学・社会福祉学研究(明治学院論叢), 110: 175-196, 2001; Adams, Robert. : Socail Work and Empowerment. 3rd edition, Palgrave Macmillan, 2003; 松岡克尚. 精神障害者のエンパワメントにおける「障害文化」概念適用の可能性と課題. 関西学院大学社会学部紀要, 99: 115-130, 2005
- 7) 秋元美世・大島 巖・芝野松次郎・藤村正之・森本佳樹・山縣文治編. 現代社会福祉辞典. 有斐閣, 2003
 - 8) 降幡博亮. エンパワーメントと自立生活運動. 大学院研究年報, 4: 149-159, 2001
 - 9) 小松源助. ソーシャルワーク実践におけるストレングス視点の特質とその展開. ソーシャルワーク研究, 22(1): 46-55, 1996
 - 10) MSA は 1989 年に設立された自律生活センターで, 障害者が中心となって運営しているサービス提供機関である。そこでは, アテンダントという有料介助者の派遣をはじめとして, ピア・カウンセリング・アドボカシー・自律生活プログラムといった事業が展開されている。自律生活センターの概略については以下の文献を参照のこと。ちなみに, 通常は「自立生活」と表記される。これはアメリカから伝わってきた Independent Living の訳語である。当初, 筆者もそのように記してきた。しかし, その内容を検討してみると, 日本語における「自律」の方が適切であることがわかる。したがって, 「自律」と記すことを提案したい。立岩真也. 自立生活センターの挑戦. 安積純子ほか編, 増補改訂版 生の技法 家と施設を出て暮らす障害者の社会学, 藤原書店: 267-321, 1995
 - 11) 杉野昭博. 「障害の文化」と「共生」の課題. 青木保・内堀基光・梶原影昭・小松和彦・清水昭俊・中林信浩・福井勝義・船曳建夫・山下晋司編, 異文化の共存, 岩波書店: 245-274, 1997
 - 12) 河口和也. 懸命にゲイになること 主体, 抵抗, 生の様式. 現代思想, 25(3): 186-194, 1997
 - 13) 石川 准. マイノリティの言説戦略とポスト・アイデンティティ・ポリティクス. 梶田孝道編, 国際化とアイデンティティ, ミネルヴァ書房: 153-181, 2001
 - 14) ニキ・リンコ. 所属変更あるいは汚名返上としての中途診断 一人がラベルを求めるとき. 石川准・倉本智明編著, 障害学の主張, 明石書店: 175-222, 2002
 - 15) 三浦耕吉郎. カテゴリー化の罟 一社会学的〈対話〉の場所へ. 好井裕明・三浦耕吉郎編, 社会学的フィールドワーク, 世界思想社: 201-245, 2004
 - 16) 石川 准. アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学. 新評論, 1992: 118
 - 17) 石川 准. 見えないものと見えるもの 社交とアシストの社会学. 医学書院, 2004
 - 18) 石川は以下の文献で自律(立)生活プログラムとピア・カウンセリングをほぼ同義に使用している。これらのプログラムの実施を中心に担っている「全国自立生活センター協議会」も以下の文献でそのような定義付けを行っている。私(横須賀)はすでに以下の文献で検討したが, 前者は再社会化のプログラムであり, 後者は精神的サポートや経験知の共有が主たる目的である。内容的に重複する部分もあるが, 同じものではない。したがって, 両者を別々のものとしてとらえるべきである。石川 准. アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学. 新評論, 1992; 全国自立生活センター協議会・自立生活プログラム小委員会. 自立生活プログラムマニュアル PART II. 全国自立生活センター協議会, 1994; 横須賀俊司. ピア・カウンセリングについて考える. 北野誠一・石田易司・大熊由起子・里見賢治編, 障害者の自立生活と機会平等 定藤丈弘 その福祉の世界, 明石書店: 74-89, 1999
 - 19) Crosby, Faye. A Model of Egoistical Relative Deprivation, Psychological Review, 83(2): 85-113, 1976
 - 20) 松本 康. 相対的剥奪と社会運動 一相対的剥奪論の再生は可能か. 思想, 737: 102-123, 1985
 - 21) 結果的には 2, 3 回しか開催されなかった。その原因としては, 強い意欲を持った障害者が毎年必ずいるわけではなかったこと, 財政的に苦しくなってしまうこと, 他の活動との兼ね合いで手が回らなくなってしまったことなどがある。
 - 22) 安川 一. 〈共在〉の解剖学 一相互行為の経験構成. 安川一編, ゴフマン世界の再構成 共在の技法と秩序, 世界思想社: 1-32, 1991
 - 23) Snow, D. A., E. B. Rochford, Jr., S. K. Worden, and R. D. Benford. : Frame Alignment Process, Micromobilization, and Movement Participation. American Sociological Review, 51: 464-481, 1986
 - 24) Snow, D. A., E. B. Rochford, Jr., S. K. Worden, and R. D. Benford : Frame Alignment Process, Micromobilization, and Movement Participation. American Sociological Review, 51: 464-481, 1986
 - 25) 本郷正武. 社会運動における「フレーミング」の理論的位置. 社会学研究, 71: 215-230, 2002
 - 26) 樋口直人. 社会運動のミクロ分析. ソシオロジ, 44(1): 71-86, 1999
 - 27) 曾良中清司. 社会運動論の回顧と展望. 曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編著, 社会運動という公共空間一理論と方法のフロンティ

アー, 成文堂: 230-258, 2004

- 28) 樋口直人. 同
- 29) Snow, D. A. and R. D. Benford, Ideology, Frame Resonance, and Participants Mobilization, International Social Movement Research, 1: 197-217, 1988.
- 30) 樋口直人. 同; 曾良中清司, 社会運動論の回顧と展望, 曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編著, 同

付 記

本研究を進めるに当たって、メインストリーム協会の方々には多大な協力をいただいた。それなくしては、本論文は完成することはなかった。末筆ながら、ここに感謝の意を記しておきたい。本当に有り難うございました。なお、本論文は文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B「エンパワーメントの課題と方策に関する比較研究」研究代表者・松岡広路（神戸大学）、平成14年度～平成16年度）による研究成果の一部である。

Techniques of Empowerment Practice in a Program Provided by the Organization of Disabled People

Shunji YOKOSUKA

Department of Human Services, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

Received 12 September 2006

Accepted 12 December 2006

Abstract

Studies about empowerment have been done in social work since Solomon discussed it. Nevertheless, it is said that a clear and basic definition has not been established. However, it can be suggested that empowerment includes self-affirmation and the ability to develop one's outside world. The latter is important for considering empowerment. The purpose of this article was to examine what techniques are effective for empowering disabled people. Therefore, the author examined what kinds of techniques are available by using a program provided by the organization of disabled people. The elements include : defining disabled people, raising an incentive through relative deprivation and pleasure, and providing a theoretical framework. However, empowerment does not succeed if there are no such techniques. In addition, social environmental reform is needed at the same time.

Key words : disabled people, program, empowerment practice, techniques of empowerment